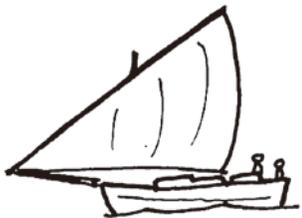


ムスリムの大航海時代

「船乗りシンドバッド」の物語をご存じの人は多いと思います。命知らずの商人がインド洋を舞台に奇想天外な航海を繰り返して富を築くという、イスラーム世界の説話集『アラビアン・ナイト(千夜一夜物語)』におさめられているお話です。もちろん架空の物語ですが、「ムスリムの大航海時代」といえる時代の雰囲気をよくあらわしています。

8世紀ごろから、アラビアやペルシアの商人はダウ船という三角帆の小型船に乗り、季節風を利用してインドとのあいだを往復していました。彼らのおもな目的は、コショウをはじめとするインドの香辛料を得ることでした。ムスリム商人は南インドや東南アジアの港市に住みつき、この地にイスラーム教が広がるきっかけをつくりました。彼らはまた、マラッカ海峡を通過して唐代の中国も訪れ、華南の広州に居留地をつくりました。

西アジアからインド洋を南西に進んだアフリカの東海岸にも、象牙、金、奴隸などを求めてムスリム商人が訪れました。港市が開け、アラブと現地の要素が融合した文化が生まれます。この地で現在話されているスワヒリ語はその一つです。



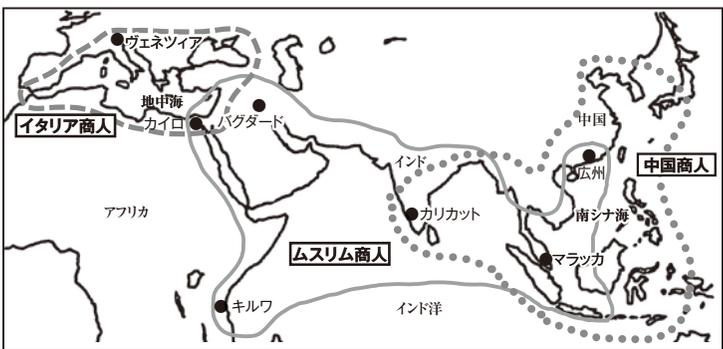
ダウ船

こうして、東は中国から西はアフリカ沿岸にいたる、広大な海上交易網ができあがりました。ネットワークの中心であったアッバース朝の首都バグダードの人口は、9世紀には100万に達します。アッバース朝衰退後は、エジプトのカイロがその地位を引き継ぎました。

中国商人の海

10世紀後半に中国を統一した宋^{すう}は、軍事的には弱体でしたが、長江下流の開発が進んだこと、商業の規制が緩和されたことから経済的にはたいへん繁栄します。商取引が激増したことで銅銭が不足し、世界初の紙幣があらわれたほどです。従来の絹織物に加え、高温で焼かれた美しい陶磁器が特産品の仲間入りをしました。

中国商人が海外に進出しはじめたのはこのころです。彼らを用いたのが、堅牢な平底の帆船であるジャンク船です。重量物の運搬に適しているうえ、正しく方位を示す新発明の羅



ムスリム商人と中国商人